奥浅草の文化

雷門と浅草寺の北側にあり、隅田川から遠く離れた地区は、地元の住民に奥浅草と呼ばれています。見かけでは、奥浅草は静かな住宅地に見えるかもしれませんが、浅草で生まれ育った浅草っ子に聞けば、人々が皆狭苦しい食堂や居酒屋に行っているから通りには誰もいないように見えるのだと説明してくれるでしょう。

これらの狭い道路では、奥浅草が大盛況を極めた歓楽街だった江戸時代 (1603 年 – 1867 年) から繁栄してきた活気に満ちた夜の娯楽が楽しめます。当時、多数の芝居小屋、役者や料亭などで繁栄し続ける歌舞伎街がありました。江戸の三大歌舞伎芝居小屋（別名猿若三座）である中村座、市村座と森田座は、多くの客を集めていました。しかし明治時代 (1868 年–1912 年) にはこれらの芝居小屋は他の場所へと移転し、今では猿若三座の石碑だけがその名残を伝えています。

奥浅草でもうひとつ重要な娯楽の目的地は、江戸の公認遊郭、吉原でした。遊郭の名残はほとんど残っていませんが、その文化的な影響は、今でも浅草観音うら一葉・桜まつりとしても知られる江戸吉原花魁道中という形で生き残っています。毎年 4 月の第 2 土曜日に開催されるこのイベントの目玉は吉原の高級花魁の道中の再現です。地元の女性がきらびやかな着物を身に着け、歌舞伎界のプロの床山や顔師が花魁という職業の全盛期だった過ぎ去りし日の花魁の華やかな身だしなみを再現します。催しには、地元の小学生によるパレード、ステージショーや大規模なフリーマーケットなども開催されます。

この地区には、東京の 6 つの花街のひとつがあります。浅草見番という奥浅草の地域の料亭や茶屋で客をもてなしていたプロの芸者の豊かな文化の保存に専念する協会の尽力により、観光客は自分の目で芸者の魅力を目撃できます。また浅草見番は、観光客が伝統的な音楽に合わせた華麗な踊りや、昔ながらの様々なゲームをしながら芸者とのやりとりを楽しめるものなど、様々なイベントを 1 年中開催しています。奥浅草の料亭の一部では、芸者のいる席での食事も提供しており、観光客はこうした娯楽を提供する店が集中しているこの独特なエリアを探検すれば、芸者が道を歩いているのに出くわす場合もあります。